

月例研究発表要旨

第269回 2014年6月25日
「西南戦争期の報道について」

松原 真

国内最大にして最後の士族反乱である明治10年(1877)の西南戦争は、新聞購読者数の飛躍的増加と、迅速正確な報道を目指す機関への成長という点において、近代日本初期におけるジャーナリズムの発展に少なからず関与したとされる。最大の立役者は、「東京日日新聞」主筆、福地源一郎であった。彼は実際に戦地におもむき、紙上に「戦地探録」と題された記事を連載し、結果、明治天皇に謁見して戦況報告をするという、当時としては異例の榮譽を受けている。しかし、戦争に伴い、明治政府が報道管制を断行、福地の報道は其中で正確であることを保証された点に注意すべきである。

本発表では、西南戦争期にその福地が発表した社説「新聞紙ノ悪徳ヲ論ズ」に対し、仮名垣魯文主筆の「かなよみ」が展開した反論を考察の中心に据える。管見では、この反論には、西南戦争期の言説状況に関する問題が象徴的に現れている。「かなよみ」と言えば、戦争終結後、いわゆる明治合巻の大流行の端緒となった『鳥追阿松海上新話』(明11)の初出が掲載された新聞紙である。初出、つまり「鳥追ひお松の伝」はまた、長編の物語的な雑報記事、いわゆる続き物(後の新聞小説)の最初とされる。文学史的に画期を為すこの続き物がいかなる論理において「かなよみ」に掲載された

のか、それを解明するために、直前の西南戦争期の紙面はひとつ手懸かりを提供すると思われる。

結論を言えば、「東京日日新聞」に「かなよみ」が仕掛けた論争は、明治政府により事実であることを保証された戦争報道を行う新聞に対し、戦略的に醜聞記事を掲載し続ける新聞が挑んだ戦いであった。言い換えれば、明治政府側の論理に則ったものではあるが退屈で、何よりも読者が喜ばない新聞記事に対する、仮名垣魯文達の挑戦であった。醜聞こそ、「官軍勝利」を連呼し画一化する戦争報道に対抗するために、魯文達が選び取った読者サービスの手段なのだ。そして、戦争中にもかかわらずあえて醜聞を報じ続けた彼等の活字媒体は、多くの読者を新たに得ることになった。

この「かなよみ」の醜聞記事から、やがて『鳥追ひお松の伝』『鳥追阿松海上新話』や有名な『高橋阿伝夜刃譚』(明12)といった、いわゆる毒婦物が生まれてくる。同時に、戦争中「かなよみ」に共感した人達が、これらの作品の読者になるのである。(本発表は拙著『自由民権運動と戯作者』第一部第二章を基礎としている)

第270回 2015年1月28日
「うたの生まれるところ——沖縄を舞台に」

中島由美

最近では日本本土でも沖縄音楽に触れる機会がずいぶんと増えたように思う。ひとくちに沖縄音楽と言っても古典から民謡、ウ

チナーポップスなどさまざまで、地域によるヴァリエーションもあるが、ここ数年の間にそうした多様性も含めて楽しめるようになってきた。そうした中から、ここでは本土では比較的紹介されることの少ない「戦世唄」を取り上げ、その成立状況、沖縄音楽の発達における意義などに注目した。

ここで「戦世唄」と呼ぶのは、沖縄戦の体験をテーマにした一連の歌謡で、戦争終結の頃から自然発生的に生まれたものである。報告者は言語研究の立場から沖縄の地域言語によるさまざまなウタに注目しているが、「戦世唄」は音楽としての価値に加え、ことばの力強さを示す好例であると考えている。本例会では演奏家の持田明美氏の協力により、曲を聴いて頂きながら進めることができた。持田氏は奄美～沖縄で土地の古老への取材を通して民謡研究に携わるとともに、研究成果を活かしたユニークな演奏活動を行っている。また、琉球古典安富祖流三線・胡弓教師でもあり、沖縄音楽全体に対する守備範囲の広い、貴重な存在である。今回取り上げる「戦世唄」については、現地調査により独自の知見を蓄積しており、その貴重な成果をご教示頂いた。

1. 沖縄音楽の基本的性格

「戦世唄」に入るまえに、その背景として「うたの生まれ方」に注目しながら、沖縄音楽の特徴を概観する。

「だんじゅかりゆし」

(唄サンシン：持田・中島)

「かぎやで風」(唄サンシン：持田)

「だんじゅかりゆし」は旅立ちの歌として人気の高いものであるが、「クエーナ」

という願かけの歌がもとになっている。サンシンが専ら土族男子のたしなみであった時代、女性たちのウタは太鼓の伴奏のみで、宗教的性格がより強く表れている。「だんじゅかりゆし」も、首里の女性たちが中国大陸など遠方に渡る男たちの航海の無事を祈り、旅程の節目ごとに夜を徹して行う行事の中で歌われたものという。

「かぎやで風」は、首里王府で発達した古典曲のひとつ。今日では結婚式などおめでたい席の幕開けに必ず演奏され、沖縄の人々にとって祝い事の必須アイテムとなっている。古典曲の歌詞は八・八・八・六の韻律による「琉歌」が基本で、これに大陸から伝来したサンシンの伴奏で節をつけて歌われるようになったという。やがて優れた節を記録する方法として中国の譜記法をもとにした譜、「工夫四」^{くんぐんしー}が工夫され、後世に伝えられた。本土の邦楽は歌い手と伴奏の分業が主流となっていくが、沖縄では古典か民謡かに関わりなく、弾き歌いが基本である。

琉歌の韻律は南西諸島全体に広く伝わり、本土における七五調同様、歌詞のひとつの型となった。また、琉歌のフレーズ（モチーフ）が、地域ごとの節にのって、民謡として歌われているものも多い。奄美群島などでも、音楽的には沖縄と異なる展開を遂げながら、歌詞（モチーフ）は共通しているものも少なくなく、影響関係を考える上で非常に興味深い。

以上、沖縄におけるウタの成立過程の例を見たが、日本本土でも沖縄でも、ウタを伴わない純器楽曲は極端に少なく、ことばが重要な役割をになってきたことがわかる。例会では本島以外での例として宮古群島の「とーがにー」と「あやぐ」も紹介した。

2. 捕虜収容所の生活の中で

「屋嘉節」(唄サンシン：持田・中島)

「PW 無情」(同上)

「原子爆弾くるだんど」(唄：中島)

さて、沖縄戦終結とともに占領統治を開始した米軍は、現うるま市の屋嘉集落から住民を強制的に立ち退かせ、その跡に本島最大の収容所を設置、捕虜収容所とした。「屋嘉節」はここで生まれた。「戦世唄」の中で最も人気の高い曲であるが、その成立の経緯については諸説ある。持田氏の調査によれば、沖永良部島出身の日本軍兵士金城守堅がここで歌い始めたものという。今日一般に歌われている歌詞と比較すると、金城作には沖縄本島ではあまり使われない表現も見られるので、これが先に歌われて、その後沖縄人たちが自分たちに馴染みやすい表現に変えて行った可能性は高いように思われる。なおメロディーは山内盛彬作の情け節を利用している。沖縄音楽の傾向として、もともとある節に自分の歌詞をのせることが圧倒的に多い。持田氏によれば、自分で作った節は「ウソ唄」と見なされたという。

「PW 無情」の「PW」は戦争捕虜 (Prisoner of War) の意。「屋嘉節」と同じモチーフを歌い、いくつかの節で歌われているが、ここでは「屋嘉節」の抒情性と対比させて、照屋林助(後述)が行進曲風に歌った形を再現してみた。

ところでこの時期、サンシンの代わりに米軍物資の缶詰の空き缶を利用した「カンカラ」サンシンが工夫され、戦後歌謡の成立に関与したことも忘れてはならない。演奏家の金城実によれば、ジュースの空き缶

にベッドの足を取り付け、パラシュートの糸をほどいて弦にしたという。伴奏楽器を調べ、収容所内で演芸大会などが大々的に開かれたとのことで、「屋嘉節」も1945年9月の演芸大会で歌われたとの記録が残っている。

「原子爆弾くるだんど」は、奄美大島から女子挺身隊として徴用され長崎で被爆した岩元イホエによる音源を参考に、再現してみた。大島民謡「くるだんど節」にのせ、原子爆弾の恐ろしさ、竹やりで対処しようとした日本の無力さ滑稽さを歌っている。こうした替え歌はおそらく各地で多数歌われたと思われ、奄美出身者の記憶に残っているものもあるが、多くは忘れられてしまった。

3. 比嘉恒敏と「でいご娘」

「艦砲の喰えー残さー」

(唄サンシン：持田・中島)

「ひめゆりの唄」

(唄サンシン：中島、胡弓：持田)

「アメリカの花」(唄サンシン：持田)

比嘉恒敏の一生はまさに戦争によって翻弄され続けた人生であった。稼ぎに出た大阪で空襲によって妻子を亡くし、両親と長男を対馬丸で亡くし、失意のうちに郷里に帰る。やがて立ち直って再婚し、子宝に恵まれ、娘たちの歌による「でいご娘」を結成して人気を博す。しかし演奏からの帰途交通事故に遭い、妻ともども死亡。事故は米兵の酒気帯び運転によるものだったという。残された娘たちは亡き父の遺志を継ぐため、父の作品を歌い続けている。

「艦砲の喰えー残さー」は、自身の体験

をもとに、口語的表現を駆使して当時の状況をリアルに描いた傑作である。米軍の凄まじい艦砲射撃によって家畑を焼かれ家族を失った人々が、戦後自らを「艦砲が食い残した残りもの」と言うようになったといい、その表現を活かしている（歌詞参照）。歌詞の韻律は七五調主体でテンポよく展開する。七五調は沖縄では、「口説」節^{くどうち}とい^ちって本土からの影響によって発達したと考えられる歌謡に現れる。語り物歌謡が発達せず、物語歌謡の少ない沖縄の中では特異なジャンルである。戦時～戦後の苛酷な体験の物語的表現は、伊江島で米軍の強制接収によって先祖代々の土地を失った野里竹松の「陳情口説」にも駆使されている。「陳情口説」も「艦砲の喰えー残さー」も、そのリアルな描写は優れた歴史証言と言え、その後のウチナーポップスにつながる新しい道を、沖縄歌謡に開いたと見てよい。

報告では、「でいご娘」が歌い継いだ作品として、「ひめゆりの唄」も取り上げた。また、上述の野里竹松作品からは、「アメリカの花」を紹介した。

朝鮮戦争の勃発によって沖縄の戦略的重要性がにわかにも高まると、占領軍は基地建設のため各地で強制的な土地収容を進めた。北部の離島伊江島でも、空港拡充のため農地が接収された。何の補償もなく先祖代々の土地を奪われた野里竹松は、基地の側に新しい住まいを定め、庭先にケイトウの花を植える。真っ赤な花が見事に咲くと、前を通るアメリカ兵たちの目に止まる。「パパさん、花ください」とやってくる無邪気な兵隊たちの求めに快く応じる代わりに、野里は「貧乏人の家の庭にも、金持ちの家の庭にも、花はどこでも美しく咲くものだ」と、自分の心情をつづった琉歌を英訳

してもらい、花に添えて渡したそうである。なお、節は「恋の花」となっている。

4. 「戦世唄」からウチナーポップへ

「どるどるどん」

（唄サンシン：中島・持田）

照屋林助は通称「てるりん」、コザを拠点にエンターテイナーとして多彩な活動を展開したことで知られる。戦争直後の少年時代に小那覇舞天^{おなはまてん}に出会って影響を受けた。舞天は歯科医を務める傍ら家々を回り、「生き残った我々こそ元気を出して「命のぐすーじ（命のお祝い）」をしよう」と、コミカルな歌や踊りを「出前」して歩いたという。この体験をもとに、林助は独自の世界を築いた。時代の流れに翻弄される沖縄を面白おかしく、皮肉をこめて揶揄しつつも、たっぷりの愛おしさをこめて、新しいウタをたくさん作っていく。「どるどるどん」は、本土返還の頃の世相がテーマ、アメリカドルの価値が一挙に下がり、「ヤマト世」となった、「さあ海洋博だ、皆で頑張って儲けよう！」と叫ぶ。

林助の作る歌詞は、首里語の流れを汲む沖縄語とは一味もふた味も違った言語に依っている。ウチナーヤマトグチと言われる、本土のことばとの混淆から生まれた彼らの世代の日常語を巧みに駆使した逞しい表現は、戦後の沖縄人の心に「自分たちの」ことばとして響いたのではないかと想像される。

こうした新しい展開も、「戦世唄」が後世に開いた道のひとつであったと、報告者は考えている。最後に紙幅の許す限りで、取り上げた歌謡の歌詞の一部を紹介する。

屋嘉節

なちかさや沖繩 戦場になやい
 世間御万人の 袖ゆ濡らち
 勝ち戦願てい 恩納山登てい
 御万人と共に 戦しぬじ
 恩納山下りて 伊芸村ゆ過ぎて
 今や屋嘉村に ゆるでい泣ちゆさ
 無蔵や石川村 茅草の長家
 我んや屋嘉村ぬ 砂地枕

[大意：哀しいことに沖繩は戦場になり、世の人は皆涙にくれた。恩納山に逃れてしのいだが、敗戦となって山を下りた。恩納山から伊芸村を過ぎ、屋嘉村に寂しく過ごす。貴女は石川村に、自分はここで砂の枕に寝る身となった。]

艦砲の喰え一残さ一（艦砲の喰い残し）

若さる時ねえ戦ぬ世
 若さる花ん咲ちゆうさん
 家ん元祖ん親兄弟ん
 艦砲射撃的的になてい
 着る物喰物むる無らん スーティーチャー
 喰でい 暮らちゃんや
 ※皆衆ん我んにん 汝ん我んにん
 艦砲ぬ喰残さ一
 神ん仏ん頼らん 畑や金網銭ならん
 家小や風ぬうととぼち
 戦果かたみていすびかってい
 うっちえーひっちえーむたばってい
 肝や誠どやたしがや

泥ぬ中から立ち上がてい
 家内求めてい妻探めてい

産し子ん生まりてい 毎年産し
 次男三男ちんなんびー
 哀りん中にん童ん達が
 笑い声聞き肝とらめてい ※
 平和なていから幾年か
 子ぬ達ん多さなていうしが
 射いやんらったる山猪ぬ
 我が子思ゆるぐとらに
 潮水又とらんでい思れ
 夜ぬゆながた眼くふぁゆさ ※

我親喰たるあぬ戦 我島喰たるあぬ艦砲
 生まれ変わていん忘らりゆみ
 誰があぬ様しいんじゃちゃら
 恨でいん悔やでいん飽きじゃらん
 子孫末代遣い言さな

[大意：若いころは戦争の時代、家も家族も艦砲射撃的的になり、蘇鉄を食べてしのいだ。神も仏も頼れず、畑も軍に取られてしまい、米軍物資を掠め取るしか道はなかったが、摘発されてさんざんな目に遭いながら、心はまっすぐと思っていた。泥の中から這い上がって妻を娶り家族に恵まれ、貧しい中でも子供たちの笑い声がきかれるようになったが、子供たちの将来を思うと夜の目もあわぬ心地がする。親も島も艦砲に食われてしまった。誰がこんな目にあわせたのか、恨んでも恨みきれない、子孫末代まで遺言しなければ。]

第 271 回 2015 年 2 月 18 日
「日本人学部学生の日本語による作文執筆過程の分析」

石黒 圭

本発表は、日本語教育における作文教育への貢献を目的として、留学生が実際に作文を書いているときの実態を正確に把握する分析方法を紹介したものである。分析自体は日本人学生の作文データを先行していたため、上掲のようなタイトルになったが、発表までに中国人留学生の作文データの分析が間に合ったため、当日はその両方の作文データを用いて行った。

文章・談話研究を考える場合、産出された結果として文章・談話を分析する研究、すなわちテキスト研究と、産出される過程として文章・談話を分析する研究、すなわちディスコース研究という立場に二分される。

本発表で対象にするのは書かれた文章であるが、文章を行為として考えた場合、文章理解と文章表現という二つの捉え方がある。文章理解の研究、いわゆる読解研究では、すでに文章が存在しているため、文章理解の過程を問題にするディスコース研究になりやすいのにはたいし、文章産出の研究、いわゆる作文研究では、産出された結果としての文章を問題にするテキスト研究になりやすい。とくに、日本語教育の分野では、誤用研究を中心に留学生の書いた作文の産出結果に目が向くことがこれまで多かった。

ところが、留学生が実際に作文を書く場面を考えてみると、作文をどのように書き進めるかという作文の産出過程に大きな問

題を抱えていることが多い。そう考えると、読解研究だけでなく作文研究でも、ディスコース研究の立場を重視し、産出された結果ではなく、産出される過程を見る必要がある。しかし、産出される過程を観察することは難しい。オンラインの産出過程を正確に観察するにはどうすればよいのだろうか。

そこで、本発表では、パソコンによる文章作成のさいにキーボードの入力ログを分析する方法を提案する。オンラインの産出過程で留学生が作文を修正する様子を細かく分析することによって、文章産出過程における問題が明らかになると考える。

本発表では修正の様子を四つの分析観点から捉える。

一つ目の分析観点は「修正の種類」であり、修正前と修正後の表現の変化を記述する。「修正の種類」は、修正のパターンを論理的に考えると、①「変更」、②「削除」、③「挿入」、④「反復」、⑤「移動」という五つに分かれる。

二つ目の分析観点は「修正の位置」であり、先頭部と修正部との位置関係を把握する。「修正の位置」は、先頭部と修正部の位置関係から、①「入力箇所修正」、②「文内遡及修正」、③「段落内遡及修正」、④「段落外遡及修正」の四つに分けて考えると、見通しが得やすい。

三つ目の分析観点は「修正の動機」であり、推測可能な修正の理由を考察する。打ち間違いを修正する「キーボード系の修正」は、①「誤入力修正」、②「誤変換修正」の二つに分かれ、自分の文章を読み手の目から改善する「推敲系の修正」は、③「表現選択修正」、④「精緻化修正」、⑤「簡略化修正」、⑥「係り受け修正」、⑦

「係り先修正」, ⑧「先行文脈対応修正」, ⑨「後続文脈展開修正」の七つに分けて考えることができる。

四つ目の分析観点は「執筆ストラテジー」であり, 上記の三つの分析観点では捉えきれない, 通常の修正とは異なる個性的なストラテジーを洗い出す。

当日の発表では, 上述の四つの分析観点から, 日本人大学生と中国人留学生の書いた作文を実際に検討した。また, 四つ目の分析観点である「執筆ストラテジー」については, 中国人留学生に特徴的なストラテジーとして, 紹介する話題のキーワードをあらかじめいくつか書いておき, その話題を膨らませていく「段落話題語ストラテジー」, 実質語を先に入れておき, 後から機能語を挿入する「機能表現挿入ストラテジー」, 母語で書いた文章を順に日本語に訳していく「翻訳対照ストラテジー」の三つを紹介した。(国際教育センター)(所属は発表時点。発行時点での所属は国立国語研究所日本語教育研究・情報センター)

第 272 回 2015 年 2 月 18 日
「日本語の今」

三枝令子

日本語の未来は, そう簡単に思い描けるものではない。しかし, ことばに関心を持つ者として, 考えておきたいテーマでもある。そこで, 水村美苗氏の『日本語が減びるとき——英語の世紀の中で』(筑摩書房 2008)をもとに, 日本語の現状を考えることで, 将来を展望してみた。

水村氏は, 現在ことばに起こっている異変として次の二つをあげる。

①現在あることばの 8 割以上が今世紀の末までに消滅する。

②世界全域で流通する〈普遍語〉, 英語が生まれている。

長く英語圏で生活した水村氏には, 英語の影響力の強さがまざまざと感じられるだろう。ことばを①普遍語 universal language, ②現地語 local language, ③国語 national language と分けたとき, 〈読まれるべき言葉〉は序列化され, 今後, 英語が普遍語かつ国語である世紀になるという。「〈普遍語〉と〈普遍語〉にあらざる言葉が同時に社会に流通し, しかもその〈普遍語〉がこれから勢いをつけていくのが感じられるとき, 〈叡智を求める人〉ほど〈普遍語〉に惹かれていってしまう」(253 頁)という指摘は, 学問の分野ではあてはまるころが大きい。これからの世界において, 国民の一部がバイリンガルになるのを目指さなければいつか日本語は亡びると水村氏はいふ。

水村氏の論に同感する点は, まず「日本語は現地語ではない」という見方である。日本語で様々なことがらを深く考えることができることは, 日本の発展に寄与するころが大きかっただろう。一方で, 水村氏が, ①表記法に意味を置いている点, ②文字の必然の変化を見ていない点に物足りなさを感じる。水村氏は, 「表記法を使い分けるのが意味の生産にかかわる」(306 頁)と述べているが, 表記の仕方は芸術に関わることはあっても, ことばはそれ自体が意味を担うものであって, 表記法は意味の生産に関わるべきものではない。目の見えな人が, 日本語を使えていないとは言えない。表記法に関連して, 水村氏は「人類の文字は象形文字, 表意文字, 表音文字と

徐々に進化してきたとされていた。」(182-183頁)と述べ、そうした変化を否定しているが、文字は、まさにこのように変化してきており、できるだけ少ない文字でことばを書き表すのが望ましい。

ここで、日本語の現状について、もう少しいろいろな問題点をあげて考えてみたい。人々のことばへの関わり方という観点から、大きくことばを自覚的に使う動きと、ことばをいい加減に使う傾向とに分けてみる。まず、前者では、近年ことばを分かりやすくしようとする動きとして、以下のようなものがある。

- ①外来語：国立国語研究所「外来語」委員会 2007『外来語言い替え手引き』ぎょうせい
- ②病院のことば：国立国語研究所「病院の言葉」委員会編著 2009『病院の言葉を分かりやすく 工夫の提案』勁草書房
- ③行政のことば：杉並区役所区長室総務課編 2005『外来語・役所ことば言い換え帳』ぎょうせい
- ④裁判のことば：日本弁護士連合会 法廷用語の日常語化に関するプロジェクトチーム編 2008『裁判員時代の法廷用語』三省堂
- ⑤日本語の平易化：「災害時の日本語」研究グループ 1995～1999「災害時に使う外国人のための日本語」マニュアル（全国版・コミュニティ版）

上にあげた改革案の出してきた理由はさまざまだが、学問のことば、専門のことばが一般の人のことばづかいから遊離した存在になっている点、また、日本で暮らす外国人が増えることで、共生を考えざるを得なくなっている点があげられる。経済連携協定(EPA)による東南アジアからの介護福祉

士候補者の受け入れも、非漢字圏の日本語学習がゼロの候補者に対して、来日4年目に介護福祉士国家試験を受け、合格しなければ帰国せよという制度で、ことばの障壁を利用して実質的に排除を意図したともとれ、世論の批判を受けた。この国家試験作成過程に日本語教育者が関わるようになった(「経済連携協定(EPA)介護福祉士候補者に配慮した国家試験のあり方に関する検討会報告」2013.8.15)のは、こうした対応が広まるのであれば良い兆しと言える。しかし、国外の人に日本語を使ってもらえるようにしようという発想は日本でほとんど見られない。外来語の言い換え案に対して、日本人学生が「日本人がもっと英語ができるようになれば良い」と感想を漏らすのを聞くと、自分たちの考えるよりどころであることばに対して、真剣に考えていないことがわかる。ことばをいい加減に使う傾向については、枚挙にいとまがない。省略語の多用、外来語の多用、読めない人名と地名の多さ、使用漢字の増加と漢字語の多用などなど。コンピュータがあれば入力できるというが、その入力にローマ字を使いながら、そのことは意識されない。漢字変換を要する現状の、思うままに入力できないという不便さには目をつぶっている。日本の人口の多さ、科学技術の発展を考えると、日本語が減ることは考えにくいだが、内なる崩壊は始まっていると言えるのではないか。